

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 23 日現在

機関番号：32639

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K13853

研究課題名（和文）ラーニング・プログレッションズ研究を踏まえた歴史授業における探究過程のモデル化

研究課題名（英文）Modeling the Inquiry Process in History Classes Based on Learning Progressions

研究代表者

宮本 英征（MIYAMOTO, Hideyuki）

玉川大学・教育学部・教授

研究者番号：10825293

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：ラーニング・プログレッションズ研究（LPs研究）は欧米で注目を集めている概念・スキルの仮説的な発達モデル研究であり、学習科学の研究成果をエビデンスとして構築される。本研究は社会科教育・歴史教育におけるLPs研究を前進させ、駆動に着目し学びの漸進・上昇のプロセスを開発・検証した。そして、段階的複線的な発達段階モデルを、教師による駆動問題の構造図と生徒による探究構造図として明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、第一に、学習者の探究過程を可視化し、探究構造としてモデル化する研究であり、不明確である学習者の「深い学び」を解明する。そうすることで、新学習指導要領における歴史教育に求められている「深い学び」を可視化し、その実現を保障する単元・カリキュラム開発やその実践に貢献できる。第二に、教授論を中心としてきた歴史教育研究では明らかにできなかった、一人一人の学習者を対象にして、多様な学びの在り方を実証的に明らかにするという新しい研究方法をとっている。学習者一人ひとりが、自発的に歴史を探究できる単元・カリキュラム開発研究や実践研究を推進することに貢献できる。

研究成果の概要（英文）：Learning Progressions research(LP Research) is a hypothetical model of the development of concepts and skills that has attracted attention in Europe and the United States, and is constructed using the results of research in learning sciences as evidence. This study advances research on LPs in social studies and history education, focusing on driving forces to develop and verify a gradual and upward process of learning, and clarifies a step-by-step, multi-track model of developmental stages as a structural diagram of driving problems by teachers and a structural diagram of inquiry by students.

研究分野：社会科教育学

キーワード：ラーニング・プログレッションズ研究 段階的複線的な発達段階のモデル化 駆動問題の構造 問いの構築学習 歴史総合 世界史探究

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 様式 C - 19, F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

新学習指導要領において世界史探究・日本史探究が新設され、探究過程が重視されることになった。近年、歴史単元開発研究は学習論に基づき主題学習を重視するようになり、申請者も現代世界に結びつく主題を設定し、段階的・向上的に市民的資質を育成する探究過程を提示し、ルーブリックにより学習者の効果を評価づける研究方法論について追究してきた。しかし、主題の設定は教師の経験的なものであり、また、学習者が主題を探究する過程は、教師の設定した単一的・規定的なものであった。一方、科学教育のラーニング・プログレッションズ(LPs)研究においては、教育的効果が高く学習者を探究へといざなう駆動問題の論理や段階的・複線的な発達過程を保障する探究過程をモデル化し、カリキュラム・単元開発研究に活用していることを学んだ。その結果、科学教育で注目されているLPs研究を応用し、実際の学習者の姿から歴史授業における段階的・複線的な探究過程をモデル化する研究を着想した。

### 2. 研究の目的

本研究は、クレイチェックらが科学教育で研究を進めているLPs研究を応用する。LPs研究は「自発的概念変化」に関する認知発達研究と「教授にもとづく概念変化」に関する教育研究を結びつけ、学習者の科学的な概念変化や思考の深まりを促すものであり、それが段階的・複線的な探究過程となることを明らかにした。本研究の目的は、LPs研究の成果を踏まえ、探究過程を重視した授業づくりが求められている歴史教育において、歴史授業における知識・資質の段階的・複線的な探究過程をモデル化し、単元開発やカリキュラム開発及び授業実践に貢献することである。

### 3. 研究の方法

本研究は、LPs研究の成果を踏まえ、歴史授業における知識・資質の段階的・複線的な探究過程をモデル化することを目指した。そのため、第一に、高等学校地理歴史科「歴史総合」と「世界史探究」のモデル単元を開発した。LPs研究に基づくカリキュラム・単元を調査し、段階的・複線的な発達段階の論理を抽出し、歴史単元の開発に応用した。そして、研究協力者と連携しながら、各学校・各クラスで実践可能な歴史単元へと精緻化した。第二に、開発した「歴史総合」と「世界史探究」のモデル単元を高等学校で実践・調査した。生徒の段階的・複線的な探究過程をワークシートやインタビューで調査し、各学校・各クラス一人一人の探究過程を解明した。また、各学校・各クラスにおける学習者の探究過程を比較することで、探究過程とその妥当性を検討した。

### 4. 研究成果

#### (1) 問いの構築学習の授業開発と高等学校における実践

社会の問い直し(クレイム申し立て)を論理とする問いの構築学習を研究協力者と協働して開発した。開発した高校歴史単元は「自由について考える」「権利について問いをつくらう」「あなたは第一次世界大戦に対してどのように行動するだろうか」「冷戦を考える」である。各単元はLPs研究を踏まえ、歴史資料を対象につくる学習者の「素朴な問い」を、社会に対する問い(疑問,クレイム)へと段階的・複線的に漸進・上昇させる授業構成と授業方法に基づいている。例えば、世界史探究単元「自由について考える」の場合には、表1のような構成となり、生徒が構築する素朴な「自由の女神について素朴な問い」を「シンボル化された自由についての問い」、さらに、「自由を相対化・批判化する問い」へと漸進・上昇させる。また、開発した各単元は研究協力者の高等学校において実践し、生徒との対話やワークシート、授業感想などを分析し、学習者が段階的・複線的に探究できるように授業構成や授業方法を改善した。

表1 世界史探究単元「自由について考える」の授業構成

#### 【1時間目前半：自由の女神について素朴な問いをつくらう】

- (1) ICTで資料1「アメリカの自由の女神」と資料2「民衆を導く自由の女神」を調べる。
- (2) 各自で問いを探究。自由の女神を調べて不思議に思ったこと、さらに調べたいと思ったことを問いにする(問い )。

#### 【1時間目後半：シンボル化された自由について問いをつくらう】

- (1) 「自由」のシンボル化を分析する。資料3「左足,たいまつ,銘板,王冠」、資料4「フリジア帽」から、自由が様々なものに表象されていることを探究する。
- (2) 「自由」が女性としてシンボル化された理由を資料5「ルイ14世とマリアンヌ」を分析して考える。絶対王政と男性国王が結びついていたため、フランス革命の際に、革命政府が「自由」を女性としてシンボル化し、新しい国家に変化したことを強調した。自由を理念とする新しい国家や国民を作ろうとしたことを探究する。
- (3) 自由のシンボル化とその目的を知って、不思議に思ったこと、さらに調べたいと思ったこ

とを問いにする(問い)。

- 【2時間目の学習：自由を相対化・批判化して問いをつくろう】
- (1)資料6「福沢諭吉と梁啓超の自由」などを読み解き，欧米だけでなくアジアに自由という思想が広がっていることを探究する。
  - (2)資料7「第一次世界大戦中のポスター」，資料8「ウィルソンの1917年4月2日の議会演説」を読み解き，自由が個人の自由や抑圧からの解放，また，そうした社会を意識させようとするだけでなく，戦争の大義名分として使用されるなど政治的な意図が結びついた。時期や時代によって，自由の使用法が変化することを探究する。
  - (3)これまでの学習を踏まえて，不思議に思ったこと，さらに調べたいと思ったことを問いにする(問い)。さらに，グループ内で問いを交換し，最終的な問いを確定する(問い)。
  - (4)なぜその問いが大切だと思ったのかについての理由及び問いについての回答を探究するために必要な学びについて検討する。

(2) 問いの構築学習における「駆動問題 (driving question)」の働きの解明  
 問いの構築学習における駆動問題は，教育内容と問いの思考(疑問詞と動詞)，学習活動と問いの主体(主語)，教材と問いの対象(動詞の対象)の関係を作り出すことを明らかにした。例えば，表2は世界史探究単元「あなたは第一次世界大戦に対してどのように行動するだろうか」の駆動問題とその構造を示している。駆動問題が作り出す教育内容・学習活動・教材によって，問いの思考・主体・対象が選択・判断され，生徒の問いが組織されることを明示している。このように駆動問題の働きを明示し検討した結果，問いの構築学習の駆動問題の特徴として，次のことを明らかにした。駆動問題は，目標(学習パフォーマンス)を達成するために，段階的に構成する。駆動問題は，歴史探究のための教育内容・学習活動・教材を構成する。駆動問題と教育内容・学習活動・教材が，生徒の中に問い(学習内容)を作り出す「足場かけ」として機能する。生徒は，駆動問題と教育内容・学習活動・教材を踏まえて「駆動」することで，自分の問いを上位のものに作り変える。

表2 問いの構築学習における駆動問題とその構造

駆動問題の構成		教育内容	学習活動	教材	学習内容
導入	第1次駆動問題	「映像の20世紀(2)大量殺戮の完成」を視聴し，第一次世界大戦について，興味を持ったこと，不思議に思ったこと，さらに，調べてみたいことを各自問いにしてみよう。	各自で第一次世界大戦の諸事象について内省的に対話する。	「映像の20世紀(2)大量殺戮の完成(サラエボ事件，動員と戦争熱，クリスマスまでには帰れる)」	【第1段階の生徒の問い】 歴史的事実に対して主観的判断を踏まえる問い
		問いの思考(疑問詞と動詞)	問いの主体(主語)	問いの対象(動詞の対象)	
展開1	第2次駆動問題	第一次世界大戦に直面した人々の行動やその背景・理由についてグループで調べ，興味を持ったこと，不思議に思ったこと，さらに調べたいと思ったことを問いにしてみよう。	グループで第一次世界大戦に直面した人々の行動やその背景・理由について対話する。	【肯定的な理由】 資料～から戦争熱や愛国心の発露，平等な負担という解釈 【否定的な理由】 資料～から宗教的信条や自由平和の尊重という解釈	【第2段階の生徒の問い】 歴史解釈についての判断を踏まえる問い
		問いの思考	問いの主体	問いの対象	
展開2	第3次駆動問題	【下位問題】 第一次世界大戦に対するあなたの判断を，議論の構造(ツールミン図式)を踏まえて，他の生徒に説明しよう。	グループでツールミン図式に基づいて第一次世界大戦への行動について他の生徒に説明する。	【肯定的な価値観】 国家の維持・発展のためには，個人が果たす義務がある。 【否定的な価値観】	【論理上の第3段階の生徒の問い】 過去の社会的ジレンマ問題について

		る。		国家の維持・発展よりも、個人の信条を重視すべき場合がある。	の判断を踏まえる問い
		(問いの思考)	(問いの思考)	(問いの思考)	
終結	【上位問題】 国家・社会と個人とのジレンマ問題をグループで出し合い、どのように行動するか話し合おう。そして、この授業で、興味を持ったことや不思議に思ったことを各自問いにしてみよう。	現在の国家・社会と個人とのジレンマ問題に対する自分の判断を踏まえて問いにする。	グループで事例を出し合い、ツールミン図式に基づいて行動を話し合う。	国家・社会と個人とのジレンマ問題（コロナ・ワクチン接種・コロナ禍での外国人観光客の受け入れなど）	【第4段階の生徒の問い】 現在の社会的ジレンマ問題についての判断を踏まえる問い
		問いの思考	問いの主体	問いの対象	

### (3) 問いの構築学習の探究の論理である「駆動 (driving)」のモデル化

問いの構築学習の実践と検証を研究協力者と協働して繰り返し、問いの構築学習とその探究構造の論理である「駆動」について検証した。そして、以下のことを明らかにした。駆動が、教育内容・学習活動・教材を足場かけにして、学習者の学びを漸進・上昇させる。駆動による学びの漸進・上昇の道筋は、個別的複線的であり、学習内容の達成度は生徒によって変化する。生徒が駆動するということは、歴史を「過去の事実」や他者にとっての「過去の解釈」から自分自身の「過去における判断」や「現在・未来への判断」へと作り変えることであり、それは、生徒それぞれが歴史を自分自身の過去、現在、未来として再構築することを意味する。

そして、学習者の段階的・複線的な探究過程のモデル化を進め、図1と図2のように示した。図1と図2は、図1の教師による駆動問題の構造が、図2の生徒の探究構造を作り出していること表している。そして、教師の駆動問題と学習者の学びが対になり「達成した/達成しなかった」ではなく、同じ駆動問題によって学びの漸進・上昇の違いが生じる学習者の段階的な探究過程を明示した。また、問いの構成要素である「問いの思考（疑問詞と動詞）」、「問いの主体（問いの主語）」、「問いの対象（動詞の対象）」を視点にすることで、問いの構築学習における学習者の複線的な探究過程を明示した。

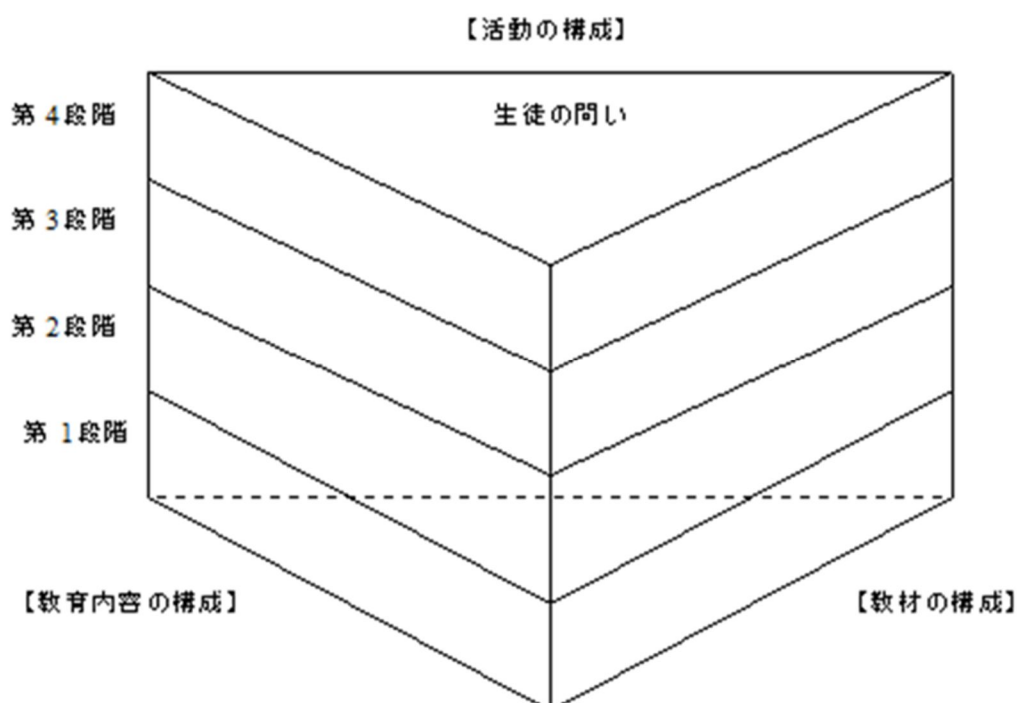


図1 教師による駆動問題の構造

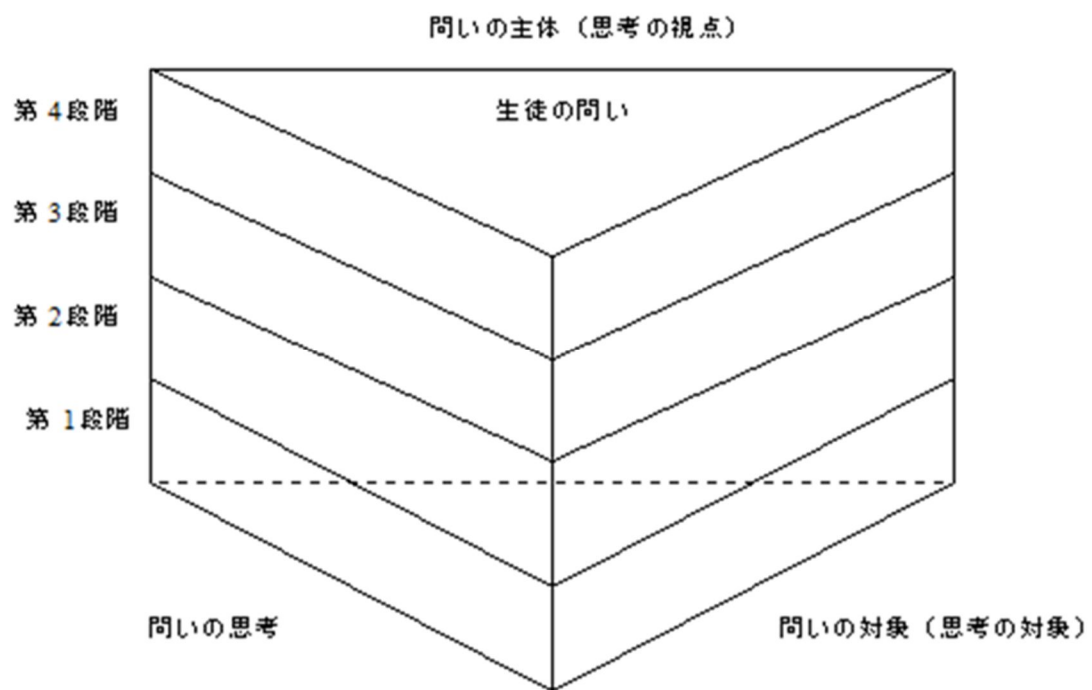


図2 生徒の探究構造

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 宮本英征 駒田芳基	4. 巻 4
2. 論文標題 生徒の「駆動」を追跡する評価方法の検討 - 変革的アセスメントを視野に入れて -	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 社会系教科教育学論叢	6. 最初と最後の頁 59 - 70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮本英征	4. 巻 第7号
2. 論文標題 「第 部へのアプローチ」ウルのスタンダードから問いをつくる - 問いの構築学習の試み	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 山川歴史PRESS	6. 最初と最後の頁 23-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 宮本英征	4. 巻 59巻9号
2. 論文標題 歴史的思考力の視点から考えるこれからの歴史授業：知的好奇心を喚起する授業デザイン 新しい歴史的思考力と学習レリバンス	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 社会科教育	6. 最初と最後の頁 18-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮本英征	4. 巻 59巻12号
2. 論文標題 おさえおきたい！単元の評価規準の設定と学習状況を見取る際の留意点：社会科の方法原理に基づく評価方法	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 社会科教育	6. 最初と最後の頁 30-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮本英征	4. 巻 755
2. 論文標題 最新情報で考える！「価値ある学習課題」テーマ5 歴史 長期的連続的な構想・構成の視点	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 教育科学 社会科教育	6. 最初と最後の頁 20-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮本英征	4. 巻 21
2. 論文標題 歴史教育における探究学習の研究 社会認識形成と市民的資質育成を視点として	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 玉川大学教育学部紀要『論叢』	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮本英征	4. 巻 739
2. 論文標題 ICT活用 主体的・対話的だけでなく深い学びを保障する手段としての活用	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 社会科教育	6. 最初と最後の頁 20 23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 宮本英征 駒田芳基
2. 発表標題 生徒の「駆動（driving）」を追跡する評価方法の検討 - 歴史探究学習・問いの構築学習の場合 -
3. 学会等名 日本社会科教育学会第73回全国研究大会 自由研究発表
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 宮本英征
2. 発表標題 ウクライナ問題を教室で語らうとすれば - 歴史を視点にして -
3. 学会等名 日本シティズンシップ教育学会 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 宮本英征
2. 発表標題 歴史学習における生徒の駆動性の論理 問いの構築学習の場合
3. 学会等名 日本社会科教育学会第72回全国研究大会 自由研究発表
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 宮本英征
2. 発表標題 歴史授業は社会問題をどのように取り扱うことができるのか? - 社会問題を作り出す当事者としての意識形成の試み -
3. 学会等名 社会系教科教育学会 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 宮本英征
2. 発表標題 歴史教育における探究学習の研究 - LPsの段階性の論理を活用して -
3. 学会等名 日本社会科教育学会第71回全国研究大会 自由研究発表
4. 発表年 2021年



1. 発表者名 宮本英征
2. 発表標題 歴史教育における探究学習の再検討
3. 学会等名 社会系教科教育学会 第33回研究発表大会 自由研究発表
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 宮本英征
2. 発表標題 「世界史B」と「世界史探究」はどう違うのか - 新年度の試行実践へ向けてのポイント -
3. 学会等名 第76回 愛知県世界史教育研究会（招待講演）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 橋本康弘（著，編集），宮本英征（著，編集）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 明治図書	5. 総ページ数 144
3. 書名 つまずきから授業を変える！高校歴史「PDCA」授業&評価プラン	

1. 著者名 二井正浩編著	4. 発行年 2023年
2. 出版社 風間書房	5. 総ページ数 286
3. 書名 レリバンスを構築する歴史授業の論理と実践	

1. 著者名 二井 正浩編著	4. 発行年 2022年
2. 出版社 風間書房	5. 総ページ数 224
3. 書名 レリバンスの視点からの歴史教育改革論	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	藤本 和哉  (HUJIMOTO kazuya)		
研究協力者	五十嵐 学  (IGARASHI manabu)		
研究協力者	駒田 芳基  (KOMADA yosiki)		
研究協力者	蓮尚 尚矢  (HASUKA naoya)		
研究協力者	松井 昂  (MATSUI takashi)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------